

平成28年度 学校関係者評価報告書

平成29年3月28日

学校法人大原学園

大原和服専門学園

1. 学校関係者評価の基本方針

学園教職員で構成する自己点検自己評価委員会が取りまとめた自己評価報告書をもとに、学校関係者評価委員会を行い、委員の多角的な意見をふまえ、より質の高い効果的な学校運営の改善のための具体案をまとめ、それをもとに組織的かつ継続的な学園運営の改善活動を行うとともに、学園の関係者に当学園の情報を開示し共有することで学園に対する理解と協力を促すこともあわせて目指していく必要がある。

その結果、当学園の社会での認知を上げるとともに当学園で学ぶ学生に対する教育の質の組織的かつ継続的な向上を実現し、学園の社会的な役割を高めていくことを学校関係者評価の基本方針とする。

2. 平成28年度学校関係者評価委員会開催概要

第1回

開催日時：平成28年10月15日（土）14：00～16：00

開催場所：大原和服専門学園 2F 講堂

- 委員会内容：1. 平成28年度学園学科編成及び学生寮についての変更について報告
2. 平成27年度自己点検自己評価報告書の報告
3. 審議

第2回

開催日時：平成29年2月4日（土）14：00～15：40

開催場所：大原和服専門学園 2F 講堂

- 委員会内容：1. 平成28年度授業アンケート報告
2. 審議

第3回

開催日時：平成29年3月4日（土）14：00～15：40

開催場所：大原和服専門学園 2F 講堂

- 委員会内容：1. 平成28年度卒業予定者就職進路状況、企業臨地実習の取組状況
平成28年度退学者状況・平成29年度生学生募集状況等報告
2. 教育課程編成委員会和裁学分科会・染織分科会実施内容の報告
3. 審議

I. 重点目標

●学生数及び学生募集について

10代後半の入学対象者に着物・和に関わる仕事がかっこいいと訴えることが必要では。YouTube等の無料で使える動画を積極的に活用してPRすべきであると思う。

(学園の方針)

現在のメイン対象者である18歳人口がどのようなメディアを使っているかを理解し、その即した表現方法を考え実施していく必要があると考える。

II. 各評価項目について

1. 教育理念・目的・育成人材像

●中期計画の策定について

変化が加速している現代には、将来学園がどこに向かおうとしているか、中期や長期の計画が必要であると思う。

(学園の方針)

現在、中期計画を策定中である。学園の変化の先の姿を教職員はじめ学校の関係者と共有し連携関係を深めるためにも必要である。

2. 学校運営

●収益源の構築

アヤナスとの連携による新しい収益源の確保は学園基盤を厚くすることに繋がるため積極的にすすめてほしい。

(学園の方針)

着物染織科を中心に授業の流れとアヤナスとの販売活動の流れを調整しながら進めている。今後も充実したものにしていきたいと考えている。

3. 教育活動

●教員の技術指導スキルについて

学生の中に縫えることと教員として教えることは異なるため対策はどうしているのか。

(学園の方針)

現在、教員の年齢層の二極化が進んでいるため若手教員の育成が課題である。教員研修計画を策定し、業界団体、関係団体の研修を効果的に組み込み育成を促進していく。

●授業のスタイルについて

生活様式が変化しているので正座はどうか。

(学園の方針)

現在は、検定等の実技試験、業界での職場環境、日本文化の授業(茶道・香道など)が正座のためすぐに見直しは考えていないが、今後の推移をみて検討していきたい。

●和裁士の活躍について

現在、日本と海外、手縫いとミシンなど縫製が多様化している中で、国内和裁士が、顧客の身近にいる技術者としてコミュニケーション能力、SNSの活用や修理など身近なサービスの提供ができるように育成することも必要ではないか。また、業界全体で和裁士等職人の地位向上を行う必要がある。

●授業アンケートの実施

授業アンケートを積極的に活用し改善につなげるのが望ましい。

(学園の方針)

一時中断をしていたが、授業アンケートを再開した。改善につながるように項目等の見直しも行いつつ活用していきたいと考えている。

●学生に対する未来への展望の持たせ方

漠然と縫う、染める、織るだけではなく、未来を見据えて今の学習を見つめなおすような取り組みが必要だと思う。

(学園の方針)

業界が多様化していて卒業後が明確になっていないため、低学年次より時間をかけてキャリアを考えられるように指導を進めていく必要がある。

4. 学習成果

●販売職につく学生のための教育の在り方

一般企業の1年以内の就職後の離職率は38%を上回るが、呉服小売についてはそれ以上である。学習内容と業務のギャップが生じているためコンサルティングセールスの概略を学ぶ必要があるのではないか。

(学園の方針)

早期離職につながらないように、販売職に就く卒業予定者に向けて講座で対応しその状況を見極め、授業への展開を検討していきたい。

●卒業生の活用について

園友会会報誌は素晴らしい取り組みである。もっと卒業生の活躍を発信すべきであると思う。

(学園の方針)

可能な限り様々なメディアを活用し、発信していくように考えている。

5. 学生支援

●学生との情報の共有化について

学生との情報の共有にはSNSなどを積極的に活用すべきと思う。

(学園の方針)

現在も学園と講師、講師や教員と学生等、ラインなどを使用して授業に関する情報や連絡などは使用している。ただし、あまり過度に使用し過ぎると教職員等が絶えず対応しなければならなくなるので、ある程度の線引きは必要であると考えている。

●学習障害等の対応について

学習障害等の配慮が必要な学生対応はどうか。

(学園の方針)

学園の教職員が対応についての知識が少なく、現在、関係機関や学園主催の教職員研修等で知識を学んでいる状況である。当学園は寮生活など環境が大きく変わるため、教職員、寮監、保護者と連携しながら現段階ではサポートをしている。

また、クラス編成や産学協同システムの教材についても対応を考えていかなければならない。

6. 教育環境

●図書室の整備について

図書は学校の中核的な資源であり、また和服やその図案に関するまとまった蔵書をもつ施設が国内でも限定的であるため、きもの関連の蔵書コレクションを蓄積・整備していくことが、中長期的に学生及び社会に対する本学園の価値を向上させることに繋がると考えられる

(学園の方針)

校務分掌を再度整備しており、図書室の運用について改善していく考えである。

●奈良の立地を活用した授業の展開について

和裁・きものは、単なる被服である以上に日本固有の伝統文化の中に根ざしており、そうした文化を理解しながらプロフェッショナルな技能・知識を身に付けていく必要があるため、奈良という立地は、本学園に大きな強みを提供するものと考えられる。そのため、奈良・京都の歴史的建造物や文化施設での学外実習は高く評価でき、今後も茶道・華道・能などを含めた着物に関連する伝統文化の学習の取り組みが一層期待される。

(学園の方針)

当学園も着物をより理解するために大変重要であると考えている。祇園祭、正倉院展、京都御所等着物を着用し訪問することを行っている。また、着物染織科においては古都校外スケッチなどをおこなっており今後も充実させていく考えである。

7. 学生募集

●学生募集について

大原学園にとっては、大変重要な課題であると感じるが対策はどうか。

従来のやり方から創造性のあるPRが大切ではないか。

(学園の方針)

18歳人口だけに頼らない学校づくりが必要である。

平成29年度入学生に香港から留学生が入学する。留学生の中には金銭目的の留学生もいるため、本学園の教育理念をふまえて、留学生募集要項をHPに掲載するなどしていきたい。

また、業界のニーズの中には男子も求められるので、校風や学習への影響も勘案しながら検討していくことが必要である。

また、当学園は過去の卒業生数や業界定着率が比較的高く連携が取りやすい環境にあるため、地域や業界団体等との連携した学園認知活動も必要である。

8. 財務

特になし

9. 法令

●情報化社会での SNS などの活用に関する学生指導について

情報化社会で軽はずみに学校のこと、企業の機密等発信ができる時代に、企業での実習等を進めるなかで事前指導の強化が必要だと思う。

(学園の対応)

これからは、SNS についての使用に関する事前指導の強化をはかる予定である。

●会議体の組織的継続の推進について

過年度までは定期的な学校改善のための会議体が明確に設定されていなかったが、学校関係者評価委員会のような外部者や、高等学校、就職先企業の関係者からの意見をとりまとめ、中・長期的経営方針、就職政策、学生募集政策、教育カリキュラム、などの改善に活用するための会議体は、定期的・継続的に設けられるべきであると考えます。

(学園の対応)

これからは学内の教職員及び学外の関係者と連携しながら学校運営をおこなっていく必要性がますます高まってきている。そのためには情報の共有化が必要で、運用規程等も整備し組織的かつ継続性のある体制にしていく考えである。

10. 社会貢献・地域貢献

●学園の様々な余剰資産の活用について

着物小売店と連携した共同研修プログラムは高く評価されるものである。

大原学園の教育をしている和裁・染め・織などの技術を必要とする業界はたくさんあると感じる。他の教育機関等にも教育連携をおこない展開を拡げていくことは広報活動にもつながり有効であると思う。

●技術の活用範囲について

業界では、和裁や染織などの技術を着物だけに使うだけではなく様々な物に展開の可能性を模索している。その技術の使い道の可能性を学ばせていくことが必要と感じる。そのためにそのような取り組みをおこなっている人を講師招聘し憧れをつくることも必要だと感じる。